

言語文化の裾野を広げるために

# 漢字を知ることが楽しい

私たちの身の回りには多くの植物がある。

名前が漢字で書かれルビがふってあれば、

小学生は、「この木は漢字でこう書くのか」と面白がり、大人もあらためて勉強になる。

「漢字併記を！」という小誌の考えについて阿辻哲次さんに聞いてみた。

漢字文化研究所所長

## 阿辻哲次

●あつじ・てつじ 1951年大阪生まれ。京都大学名誉教授。専門は中国文化史、中国文字学。文化庁文化審議会国語分科会漢字小委員会委員として、2010年の常用漢字表改定に携わる。『戦後日本漢字史』（新潮選書）、『漢字のはなし』（岩波ジュニア新書）など著書多数。

ることは確かです。

**そもそも漢字とは**  
漢字とは、中国の最多民族である漢民族が話す漢語を文字化したものです。誰が、いつ作ったのかは定かではないのですが、紀元前一三〇〇年ごろには亀の甲羅や動物の骨に文字を刻んだ「甲骨文字」が使われており、これが現在の漢字の先祖であ

ることは確かです。  
長い歴史をもつ文字で、西洋文明にはないものですから海外の人には魅力的に映るのでしょう。漢字をタトゥーにしている人もけっこう多いですね。ただ彼らにとっては意味よりも形が大事なのであって、以前私の娘がニュージーランドに留学していたときに友人から漢字のタトゥーを入れたから見に来てと呼ばれて、

見に行ったところ、「読書感想文」と彫られていたなんて話を聞いたこともあります（笑）。

それはさておき、漢字は中国の高度な文明を受け入れて自国文化を発展させていった周辺国家にも浸透し、話し言葉は異なっていますが、漢字を讀み書きすることで交流できる漢字文化圏が形成されていきます。朝鮮半島の人々はもちろん、日本、そし

てベトナムでも漢字が使われるようになりました。漢字はいわば国際共通文字だったわけですが、現在、漢字を使い続けているのは中国と日本だけです。

## 万葉仮名という工夫

ただ、ご存じのとおり中国と日本では漢字の使い方が異なっています。日本に漢字が入ってきたのは卑弥呼の時代と考えられます。漢字を使って中国との外交が行なわれていたことがわかっていますが、当時はまだまだ幼稚な漢字文化でした。日本人が漢字を使って自由に高度な文章表現をできるようになっていくのは八世紀ごろ、自分たちの言葉を漢字でより正確に表記できるようにシステムを工夫しだしてからです。

たとえば日本の人名や地名、形容

詞といったものは中国の漢字だけでは表記できない。「犬」「空」「梅」など中国にも存在しているものには漢字が用意されているけれど、日本にはあつて中国にはないモノもあるわけです。また「さやか」というのは「クリア」という意味の形容詞ですけれども、この単語を中国からの漢字を使って一文字で表現することもできません。

そこで編み出されたのが、漢字の音読みをうまく使って発音を文字にしていく方法です。「あ」の発音は「安」「阿」を使う、「か」の発音は「可」「加」を使うなどです。「いづも」の地名は「伊豆毛」と記され、「いわし」という魚は「伊委之」と記された。「委」は、「倭」からニンベンを外したものです。これが「万葉仮名」と呼ばれている表記方法で、『万葉集』などで盛んに使われたこ

とから名づけられています。

「一二三」と書いて「わるつ」と読ませたりする今風のキラキラネームは万葉仮名的な使い方とは少し違いますが、いまでも名前などで漢字の音だけを用いる方法はよく使われていますね。松田聖子さんのお嬢さんは「沙也加」さんですが、この表記は万葉仮名といつてもいい。私の家内の知り合いには「五輪男」と書いて「いわお」と読ませる子もいました。東京オリンピックのあつた昭和三十九（一九六四）年に生まれたからですが、みんなからは「ごりお」と呼ばれていて、ちよつとかわいそうでした（笑）。

さらにその後「万葉仮名」をベースにして、「伊」から「イ」、「呂」から「ロ」といったカタカナが作られ、「波」を崩した草書体から「は」、「任」の草書体から「に」のように、